



今月の御聖訓



教を怨つ所
 是淨飯之林也と云
 仁行す事自持
 之を白く其を如之欲
 此は始の業障忽ち消へ
 妙蓮忽ち開き給ふか。

(教主釈尊の)

道(成道は淨飯・摩耶の得道、)
淨飯・摩耶ノ得道、吉

占師子・青提女・目犍
(吉占師子・青提女・目犍尊者は)

尊者(同時の成仏なり。是くの如く觀する)
尊者(同時ノ成仏也。如シ是ノ觀スル

時、無始ノ業障忽ち消へ、心性ノ

妙蓮忽ち開き給ふか。

【忘持經事 九七七頁】

目次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
お講講話「聞法の大切さ」	菅野憲道	2
家を守る話〔その九〕	松井照雄	8
フォトレポート【正本堂解体始まる！】		10
読書案内『少年動物誌』	松田銘道	12
《婦人部総会から》		
【婦人部長挨拶】	尾林みつ	13
【研鑽発表】①「日妙聖人の求道の姿に学ぶ」	清水光子	14
天地つかの間〔その③〕	成田詳道	18
ちよつと寄り道②〈縁は異なるもの〉	森田観道	19
恵日だより		20
九月の行事 長月詠草 恵日俳壇		

知的急情といふこと

菅野 憲 道



近世以降、本宗において法門研鑽が盛んであったのは日寛上人の時代をピークとする。しかし、六巻抄が余りにも体系的で完成度の高い法門書であったためか、それ以降の学徒の傾向が、六巻抄の安易な受け売りと、要文の孫引きでお茶を濁す事が多く、自ら苦学して御書や大部の経釈論を精読し、それぞれの時代状況の中での主体的な思想信仰として、宗開兩祖の法門を自身が把握しなおす、生きた教学研究の態度が失われ、事大主義、形式主義に流されたようである。そのため以降に真の学匠が輩出せず、大石寺教学は長期低落傾向にあったと評しても、あながち見当はずれでもあるまい。実際、細草壇林なども幕末期には衰退傾向にあったといわれている。

封建教学と称される江戸期日蓮各派教学の中でこそ、威力を發揮した六巻抄だが、明治以降、合理主義や科学思想、文献史学等の近代思潮の大波の中で、御書の真偽問題や宗史の再検討が始まると、さすがに無敵とはいかず、霑志問答や顕本法華宗、慈龍窟との問答など、かなり苦戦を強いられたものである。

そのためもあって、堀日亨上人や福重照平師等が宗史・宗学の近代化にとり組まれたが、いかんせん宗門主流が戒壇本尊と血脈の権威の上にあぐらをかき、生活の糧と心得て、自行化他の行体と法門研鑽という法財の蓄えを忘れたから、教団全体としては全く内実に乏しいものになってしまった。

現在も、仏滅年代や大乘非仏説、五時八教教判の否定等をはじめ、相伝部の真偽論、近年の国立戒壇論や王仏冥合論、本尊観等、宗門首脳は全く怠けてこうした問題に真剣に取り組もうとさえしない。いくら「謗法の輩が……」等と罵ってみても、教学的な矛盾は少しも解決されないし、自身の懈怠謗法はいかがするのか。現代の知的批判に耐えられないような教学が人々を魅了するはずもないし、後代に生き残れるはずもない。残るとすればその形骸だけであろう。

まして環境問題や脳死問題等……多くの社会問題について、日蓮門下として、法華経の一念三千の法門から何らかの意見の表明があっても良さそうなモノであるが、いまの宗門には、とても世間を導くような見識も理念も期待する方が無理というもの。信徒の供養によって身を養う者としては、「信の一字」などと、行学を怠ける口実に使うのはやめにして、「一念に億劫の辛労を尽くせ」の遺誡を守り、凡僧なりに法門研鑽に汗したいものである。法門混乱の現代、それがせめてもの報恩行ではないだろうか。

お講講話(要旨)

拜読御書 「上野殿御返事」(全集一五四頁)

聞 法 の 大 切 さ

菅野憲道

《阿育王の故事》

阿育王は、紀元前二六八年から二三二年、即ち釈尊誕生が紀元前五六六年ですから、その約三百年後、マウリヤ王朝の三代目として、はじめて古代インドを統一した大王です。この帝国は現在のインドより広大で、パキスタン、アフガニスタンあたりまでを支配したといわれております。この大王は、即位後八年目にカリンガという国を征服したのですが、その戦闘がひどい激戦となり、多くの犠牲者を出してしまい、その悲惨さに阿育王は深く後悔し、これが契機となって仏法に帰依したと伝えております。それから、武力による支配から法治国家、あるいは徳治主義に政策を転換し、多くの善政を施しました。

とりわけ自身深く仏教に帰依し、三宝を篤く保護するとともに、その教えを実践、所々に布施行として福祉・慈善事業を行い、あるいは道路や井戸を整備したり、療養院を作ったり、またギリシヤとかエジプトといったよその国まで使いを遣わして、正法を説いたといえます。

また、この御書中にも「八万四千の石の塔をたて給う」と書か

れておりますが、阿育王の仏塔建立は大変有名です。これは、釈尊が亡くなられた直後、八つの大塔が建てられ、そこに釈尊の舍利(遺骨)が納められていたのですが、その内の七つまでを開いて分骨し、全インド中に八万四千の宝塔を建て、その石には多くの法語が刻まれており、これによって、広く仏教を流布したので、この阿育王の仏塔は今日でもたくさん現存しております。



初期の形態を残すガンダーラ式の仏塔

さらにこの阿育王の仏塔建立は中国・日本にも影響を及ぼし、日本では鎌倉時代に近江国石塔寺の石塔を阿育王の仏塔とする伝説が生まれたりしています。さらに東南アジアの国々では今でもスツーパー（卒塔婆）といわれる仏塔信仰が盛んです。これらは法華経法師品等をはじめ、多くの経典に宝塔供養が説かれているところでもあります。

ところで、もともと仏教では仏像崇拜という形式はなく、釈尊の精神を学び、実践修行することが仏教のすべてでした。その仏教のあり方が変わってきたのは、釈尊滅後五百年も過ぎた頃、マウリア王朝も滅びて北方のクシャー族に占領された時代、過酷な異民族の支配下で仏教教団の中から釈尊を渴仰し、救済を願うあまり、仏像を礼拝する風習が起こったといわれております。「正法」「像法」という時代区分はここから起るのです。正法時代は、仏像を礼拝するのではなく、仏塔を象徴として、そこに修行者が集まり、教法そのものを尊重し修行していたのです。

もう一つ、有名なことは経典の結集です。釈尊入滅直後に第一回目と二回目の結集が直弟子によって行われましたが、阿育王は第三結集といって、経典や口承を残す事業を起こされ、仏教を後世に伝えようと資財を傾けたのです。

このように、現在に至るまで仏教が世界に流布しているのも、この時、阿育王が仏教の外護と流布に力を尽くしたことによるのであります。

《阿育王の前世譚》

この阿育大王には当時から因縁談があります、徳勝童子の話です。釈尊在世中のこと、道ばたで遊んでいた二人の子供が、たま

たま遊行中の釈尊に出会いました。子供は自分たちは何も仏様に差し上げるものがないが、せめて土の饅頭でもと捧げたところ、仏様はにっこり笑ってお受けになり、「この子は百年後に国王に生まれ変わって、仏法のために力を尽くすことになるう」といわれたと言います。その一人、徳勝という子が、この功德によって阿育王に生れ変わったというのです。「阿育大王伝」等多くの書物に載せられた著名な話です。そして、

「初めは悪王なりしかども、後には仏法に帰して六万人の僧を日々に供養し、八万四千の石の塔を建て給う。その王は四分の一を掌に握って、竜王を従え雨を心に任せ、鬼神を召使い給いき」(全集一五四四頁)

ここで、「竜王を従え……」といいますが、古代国家では宗教と政治は一体不可分のもので、「祭り事」という宗教行事が「政」の中心的なものでした。

現代社会の我われは内面的な宗教や思想・哲学といったものと、外面的な政治・経済・社会というものは、はっきり区別しておりますが、古代は一つに考えられていたのです。いまのように科学や合理主義が発達していない時代ですから、自然災害や天候不順・疫病といった災いが起こると、「鬼神乱るるが故に万民乱る」といわれるように、人間の精神的な腐敗・墮落や国王の不義不徳が原因としておこってくるというふうにならされておりました。科学や技術の発達した現代社会は、政治も宗教とは無関係になり、まったく別次元の問題と考えられております。

しかし、人間が何に高度な文明を築いても、人間自身はこの地球、この宇宙の中に生み出され、生かされている存在であり、その精神活動を含めて、自然や宇宙に連なる生命を与えられている

ことは確かなことです。

昔の祭政一致のように、宗教という精神的な営みと、政治という人為的な営みが、まったく合致するとはありません。しかし車の両輪のように、あるいは大地の下を流れる地下水が草木を育てるように、宗教と世間法は必ず目に見えないところで、「二而不二」の相即した関係にあるというのが仏教の立場です。

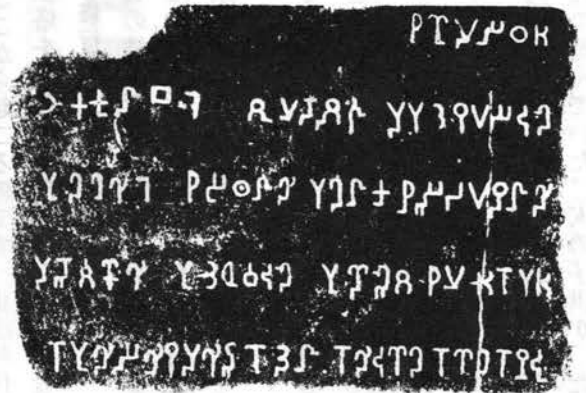
そのことが「竜王を従え雨を心に任せ鬼神を召使い給いき」と、自然の風雨を司るといわれている竜王までも阿育王が治め、疫病等の災いを起こすといわれる鬼神をも召し使って、世の中を平和に統治する術を心得ていたといわれているのであります。

そしてこの阿育大王が仏教をもって理想的な国家を建設したことが、後に中国や日本、東南アジア諸国等に広く大きな影響を及ぼしたことは言うまでもありません。我われもまたその歴史的・文化的な土壤に生きていますのであります。

《時光殿の志の篤きを称う》

「彼は飢渴ならず、今は飢えたる国なり」(同)

徳勝童子の故事は飢餓という状態でもなく、しかも土の餅の供養によって後に阿育王となった。これに対し今のあなたは法華経



阿育王法勅石柱の拓本

の行者に種々の供養をなされた。そのうえ、当時は飢饉で食料に困窮しており、こういう時期に身延山中まで多くの品々を供養して来られたことは、じつに大きな功德である。これをもって思うならば、その信心によって釈迦仏・多宝仏や十羅刹女等の守護を受けなければならない。そして次に有名な、

「抑も今の時、法華経を信する人あり。或は火のごとく信する人もあり。或は水のごとく信する人もあり。聴聞する時はもへたつばかりをもへども、とをざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申すはいつもたいせず信するなり。此はいかなる時もつねはたいせずとわ(訪)せ給へば、水のごとく信ぜさせ給へるか。たうとしたうとし」(同)

と、常に、変わることなく大聖人の下へ多くの御供養を捧げられ、何なる時も正直に法華経・大聖人を信奉していた南条時光殿の信心の姿勢を、まことに水のような、不変の信心であると、その深い志をほめ称えられているのであります。

《聞法の大切さ》

ここに「とをざかりぬればすつる心あり」とありますが、よくよく肝に銘じなければいけないことだと思えます。

法華経には、正・了・縁という三つの仏性が説かれています。我われにも理論上は誰にでも仏性はありますが、現実には縁に触れて初めて仏性は発動するのであって、縁に触れなければ仏性は起こらないということです。

一番大事なのは、縁因仏性といって、実際に少しでも多く仏法に縁することなのです。大聖人の仏法に縁してこそ、初めて我われにも信が起こり、妙法の命が涌出してくるのです。その縁に触

れることの一番基本的な在り方が聞法下種ということなのです。仏法を聞くことによって、いつしか自分の心の中に根を張り、自分の人生観や価値観の上に大きな指針となって、成仏の道に進むようになるのであります。

ですから縁に触れることが非常に重要なのです。もし、仏法を誰からも聞いたこともなく、何処からも教えられることもなければ、いくら有能かつ人格的に立派な人であっても、生死一大事の仏法を自己の才覚で悟ることは出来ることではありません。少し思いをめぐらせば、所詮現代人の智慧たるや、軽薄かつ短慮にして、己れ自身の価値観さえ不確かなのが分かります。この仏法を知らずしては結局道に迷うことになるでしょう。

法華経の中にも大乘の国は耳根得道の国といって、耳から仏法を聞いて道を得る世の中であると説かれておりますし、また仏法の智慧を「聞・思・修」の三つに分けて、真の智慧はまず聞くことから始まるといわれています。

世間のことでもそうですが、本当に大切なことは「まず良く聞くこと」です。智慧ということはまず自分の耳で良く聞き、心の中で思い、さらに実行にうつすことが、本当の智慧の働きであるとされています。

「何度聞いても分からない」「何度聞いてもすぐ忘れる」……、これは仏典や御書の責任ではありません。むしろ聞いている側に求道心がなく、頭の中では別のこと、自分勝手なことを考え、ウワの空で聞いているからそうなのです。このことは仏法も世間法も同じことで、すべてのことはこちら側に受け止める下地（求道心）がなく、ぼんやりしていれば、どれほど素晴らしい宝に出会っても、まったく気がつきません。もし雪山童子のごとく、一心

に求める心が強ければ、一度聞いただけで心にしっかりと刻みつけられるものです。要は、求道の志いかなです。信念受持といって、真っ直ぐに正法を求める心、仏法をまじめに願い求める心が成仏の要諦になるのであります。

しかし、実際のところ我われにはそこまでの強烈にして変わらぬ求道心はありません。そこで何度も何度も聞いて心にとどめることが大切なのです。何度も何度も寺院に参詣して仏法を聴聞し、また互いに仏法について話し合うことが大切なのです。お講参詣等の仏縁から遠ざかれば必ず退転に結びつくことは多くの例が示しています。常に仏法に縁していれば、いつか時が熟して、仏法が本当に大切に有難いものだということが、腹の底から納得できる時が来るのです。

《法華を識るものは世法を得》

このようにいいますと、仕事や家事の多忙を理由に参詣を怠る人がいます。また信心では飯は食えない等と考える人もおります。それは勘違いしているのです。信心と生活は矛盾するものではありません。

それは、「観心本尊抄」などに、

「天晴れぬれば地明かなり、法華を識る者は世法を得べきか」

(全集二五四頁)

とありますが、仏法の心を会得すれば、そのまま世間法にも通ずるのです。否むしろ、正しい信念・信仰を確立することが世法でも失敗しない法なのです。実際超多忙でも、世間には仏法を信仰をしながら、世間的にも立派に活躍された方は数多くいるのであります。

また、大聖人は「四恩抄」などに、法華經によって流罪の身となつたことは、昼夜十二時中に法華經を身に行じていることであるとされ、信念受持とは、結局自分たちの身口意の三業に法華經の教の通り実践すること、すなわち道理を根本とする精神であるとか、慈悲の振る舞いであるとか、自我の執情を無くすこととか……、仏法を受持し、南無妙法蓮華經を持つことの中に、自分よりもまず仏法のこと、皆んなのことを大切に思う……、自身の周囲におこるすべてのことを仏道修行と捉えていく等々、その中にすべて含まれているのでありまして、それが身口意の三業に持つということであると思います。

そうすると、仕事をしながらでも、家事をしながらでも、自分の心に起こってくる利己心や貪欲・瞋恚・愚癡の心を、いつでも妙法蓮華經を信ずる心で包み、浄化していけば、そこに本当の生活即信心という仏道修行の場が顕現するのであります。

かくして人生における出処進退の法を掴むことができれば、後は日常の世法についても迷うことなく、自ずから対処の法も定まってくるのであります。

また、我われはいつでも子供のことや家族のことを思うのですが、仕事が忙しいからといって忘れているわけではありません。信心も同じこと、

「それ信心とは別にこれなく候、夫の妻を思うが如く、親の子を思うがごとく……」

と教えられている通りだと思えます。

《破綻している現代人の思考方法》

思うに戦後日本は物質主義とか経済優先主義の流れの中で、効

率、利潤、快適さ、利便さ等の価値判断ばかりが強調され、子供のころから「早く、早く」と競争に追い立てられるような社会になっております。そのため、物質的に豊かになった反面、生きることの意味、真善美等の真の価値、人間同士の信頼と共感など、多くの大切なことが見えにくくなってしまい、物はたくさん所有していても、心は貧しく疲れて、不安な人々が多くなってきたことも事実です。

あるいは個人主義がきわまって、わが家の庭は一生懸命きれいにするが、野も山もゴミだらけという状況があります。そこには自然世界はおろか社会や国家、人類の未来を配慮するような思想も信仰もありません。

このことは企業や宗教団体ですらまったく一緒なのです。自分たちの組織や教団さえよければということ、とにかく拡大のために競争々々で、相手はみな敵だという考え方です。

結局戦後資本主義の根底に、人間の欲望を全面肯定し、限りなく欲望を満たすこと、競争社会の中で自己中心的に生きていくことといった風潮が、一定のルールの中で解放され、正当化されてきたことが、いまあらゆる矛盾となって現出しているような気がするのです。

もともと人類の限りない欲望を満たすことを肯定すれば、資源には限りがあるので、必ず破綻することは明らかです。

欲望の制御や質的転換という宗教・哲学等によらずして、科学・技術や経済・産業だけに頼るだけでは大変なことになります。

現に今の世界の弱肉強食的な自由競争が、飢餓問題一つ解決できず、今でも地球上で毎年五万人ぐらゐの人が餓死している。

日本の国では五百万人以上の食料が捨てられている一方でこの現

実があります。さらに大量生産・大量消費に付随する問題、そこから生まれてきた「二酸化炭素による地球温暖化」「フロンガスによるオゾン層の破壊」「排煙等による酸性雨」「ゴミ焼却によるダイオキシン」「環境ホルモン」「資源の枯渇」等の問題など、どれ一つとっても深刻な問題が山積しています。これも、経済発展という直線的な思考によって、大量消費社会を生み出し、連鎖する円環型の自給自足の生活や経済を否定してきたツケが回ってきたようです。

また、最近指摘されていることですが、生物の種が急激な勢いで絶滅しているそうです。アメリカのバツファローや日本の狼・カワウソ・朱鷺などが絶滅したことは有名ですが、そんなものではありません。大体地球上には二百万種の種があるといわれておりますが、それが人間が増えるとともに、だんだん絶滅し、昔は百年ぐらいかかって、二・三種類が絶えていたようなのですが、それがここ三百年、資本主義が発達して世の中が近代化してからは、加速度的に種の絶滅が増えており、今は毎年四、五万種が絶滅しているといえます。この調子でいくと、あと三・四十年で地球上の生物種はほとんど無くなってしまふといわれるほど、深刻な問題になっていっているのであります。



今は絶滅した朱鷺

《まず自分自身の意識改革から》

このような問題一つを取っても、今のような生活のスタイルや経済のあり方では、にっちもさっちもいなくなることは、分かりきったことです。それにも拘わらず誰もそれを解決しようとせず、相変わらず物質的欲望の追求を続けているのが今の世の中でありませう。

しかし、どこかで少しずつでも、そのようなあり方を変えて、法華経の一念三千法門で説くように、単なる競争から共生とか調和を目指していかなかったら、後から酷い目にあつてしまふ。今の文化や生活のあり方を改善し、地球という小さな船で大勢の人が末永く仲良くやっていけるようなシステムを考えなければならぬのは、当然のことだと思います。

何といっても、単なるモノを充足するような価値観から、もっと内面的なものを充足する方向に進まないと、人間自身の欲望によって個人的レベルでも、人類的レベルでもとんでもないことになってしまふでしょう。

おそらく立正安国論で言われている、三災七難とか、自界叛逆難・他国侵逼難など、現代的な形における「鬼神乱るるが故に万民乱る」というような状況が、我われの周辺に押し迫っていると思ふのであります。

どうか法華経の信心を持つ我われは、こうした問題をも人ごとではなく、自身の問題ととらえ、自分の信仰のめざすものをよくよく確認して、自分の意識から改革していきたいものです。そして、このような人類全体のレベルの危機も、個人のレベルでの危機も、真の解決は正しい宗教を抜きにしては有り得ないことを、しっかり自覚し、訴えて行きたいものであります。

南無妙法蓮華經

家を守る話も、九話になりましたので、直接家の話ではないのですが、一息入れる意味で今回は家に付き物の家具の話をしてみましょう。

近年の家具、昔の歴史のある家具にも二つの顔があります。その一つは生活用



〔家具の話〕

具として機能を重視した家具で、今一つ美術工芸品として格調の高い家具もあります。変わった例として、江戸時代以降、明治頃まで商家によく見られた「箱階段」です。これは一個一個の箱をちょうどエジプトのピラミッドの石積みのように

に積み上げ一階から二階の階段とした物で、しかもその箱の側面は全部引き出し家具となつています。合理性と機能性を兼ね合わせた生活の知恵の最たる物であると思います。

昔の家具は「指物師」と言われる家具職人が一つひとつ手作りで作られました。言い替えれば二つと同じものができない稀少価値の高いものが多くありました。現在の家具づくりは個人の工房を除き、工場での量産品が多く同形同質の品物が、大阪であれば四国・九州にもあるといった様子です。

家具工場をのぞいてみますと、精密機械がずらりと並んだ中で、工具さんが家具を作り出しています。それも現在では完全に分業化されているところがあります。例えば「デザイナー」がおり「用材乾燥寸法加工」「プレス加工」「表面化粧加工」等下請け工場から集められた品々を組立工場で商品化されるようです。

いずれも何十本、何百本の単位で生産されます。先ほど「指物師」の話を少々致しましたが、昔は同じ指物師でも自分が得意とするものを好んで作る自由と傾向がありました。例えて唐物を得意とする人、からくり物を好む人、また箱物を手掛ける人、といういろいろな職人さんに共通しているのは、収入を度外視して作品に入魂する人がたくさんいたことです。

唐物とは香木の一種（紫檀とか黒檀等）で香台とか花台・茶器・棚等諸々の置物工芸品をいいます。

からくり物とは、中・小型の引き出し家具等で、一見ただの引き出し物に見えますが、その実智恵の輪のように仕掛けがしてあり、一つの引き出しを引き出し、その奥に隠された仕掛けを外さない限り、次の引き出しが引けない、その次も同じようにしてあり、容易に全部の引き出しが開けられない家具で、今日の金庫の役割をしていたのでしょう。忍者屋敷の仕

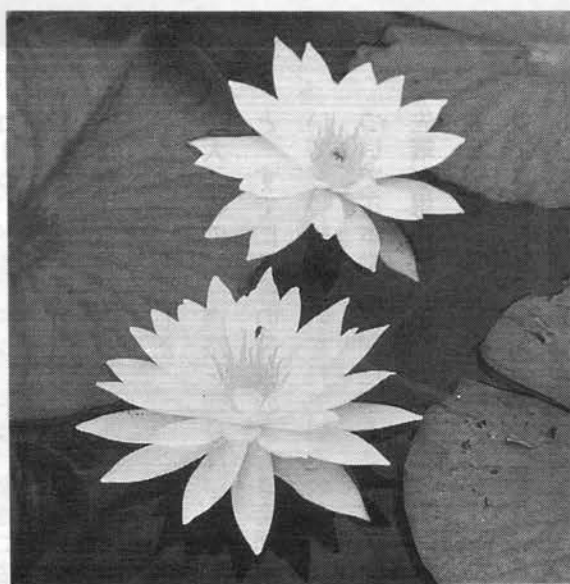
掛けもその類でしょう。

箱物とは読んで字の如く、あらゆる箱物を依頼者の注文に依じて作っていったようです。今日ではそのような職人さんは皆無で、わずかに残った作品をどこかの展示品で見るのが精一杯でしょう。

昔と今日の家具の作り方の一端を紹介いたしました。私は思いますが、畳の部屋で丸い卓袱台ちぶだいを囲んで一家団欒の時代から椅子・テーブルの生活に変わった時期が、その移り変わりのように思います。しかし、今日の家具も経済性と機能美の点から見ると、なかなか優秀な物があり、その点現在生活に沿ったものでしょう。

最後に家具の購入の仕方と扱い方を述べておきましょう。家具と一口にいつても種々雑多ですが、その作り方はほぼ同じと考えてよいでしょう。先ず購入ポイントですが、昔から家財といわれるように、永く使う物ですから、実際に手に触

れてみると同時に、使う時には見えることのない後ろ側の仕事の良し悪しも商品価値の対象になります。「色」「形」「機能」とも飽きのこない物をと、誰しも思うことですが、これが大変難しいことで



す。しかし、納得しない物を買急ぐのは避けたいものです。

次に手入れますが、前にも述べたように、現在は無垢（木生地）の加工品は少数しかありません。したがってフラッシ

ュ板にビニシートの特殊加工がされておられますので、ワックス等をあまり使用する必要はなく、年に一・二度でいいでしょう。後は乾拭きで充分です。但し汚れがひどい時は中性洗剤で軽く拭き取るぐらいにしましょう。中にはワックス、洗剤等を間違えたり多量に使うと、表面が化学物質でできているため、「小皺」ができたり「変色」したりしますので注意が必要です。

また家具の上に花瓶とか重い電気製品を置く時は、布とか敷き板をしておきましょう。跡がつくと取れない製品があります。

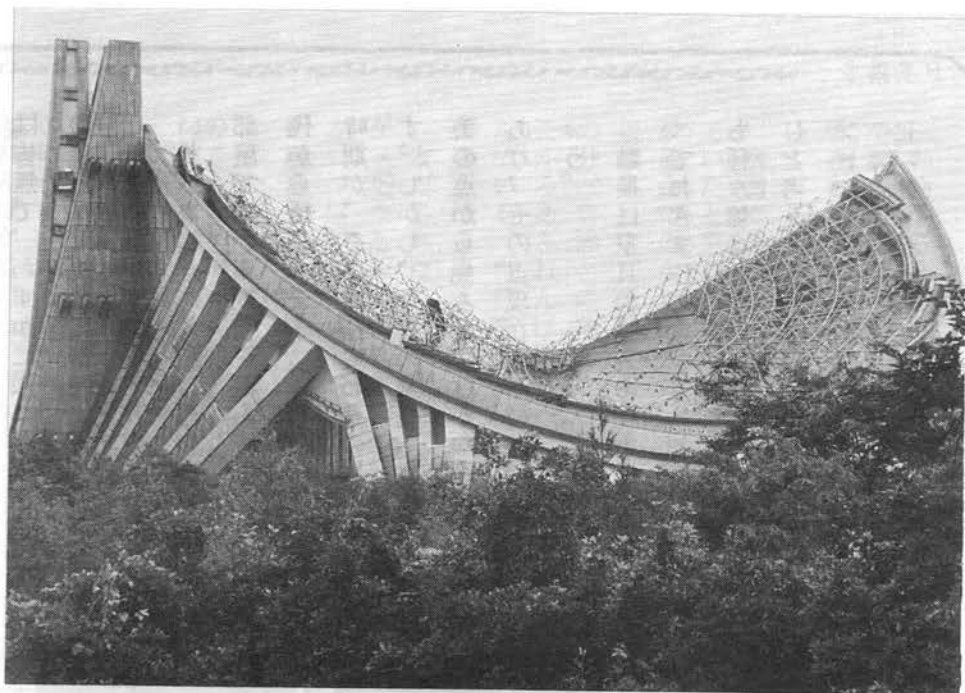
最後に輸入製品（特に北欧の製品）は無垢でできた商品が多くありますので、購入時に確認し、手入れの仕方を聞くことも大切です。

（なお、この項ではスチール家具はのぞきました。）

今回は、建築雑学の予定です。

フォトレポート

屋根の銅板はすべて剥がされた



正本堂の解体が始まったというので、その進捗状況を見たいと思いき出かけてみた。

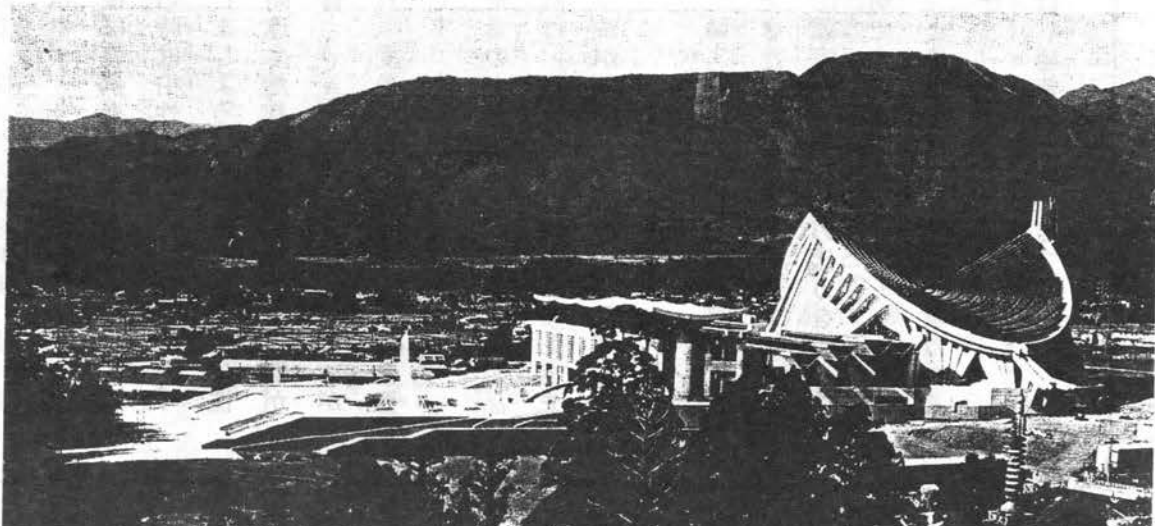
ガン、ガン、ガン。ゴーツ、ゴーツ、ゴーツ。ドツ、ドツ、ドツ。複雑に絡み合った頭をつんざくような轟音と地響きが、大石寺内だけでなく、雨中の周辺地域一帯に鳴り響いているといった感じだ。

大石寺の周回道路を回りながら正本堂を見ると、すでに妙壇の屋根の銅板は全部剥がされていて、骨組みが晒されているのがまず目に入る。ついで正本堂の西側に回ると、巨大な掘削機の先端が思逸堂の屋根のコンクリート部分を繰り返し破壊していて、鉄筋が剥き出しになった無惨な姿である。

どうやら奉安殿では御開扉中であつたが、轟音と地響きは一切お構いなしで鳴り響いている。

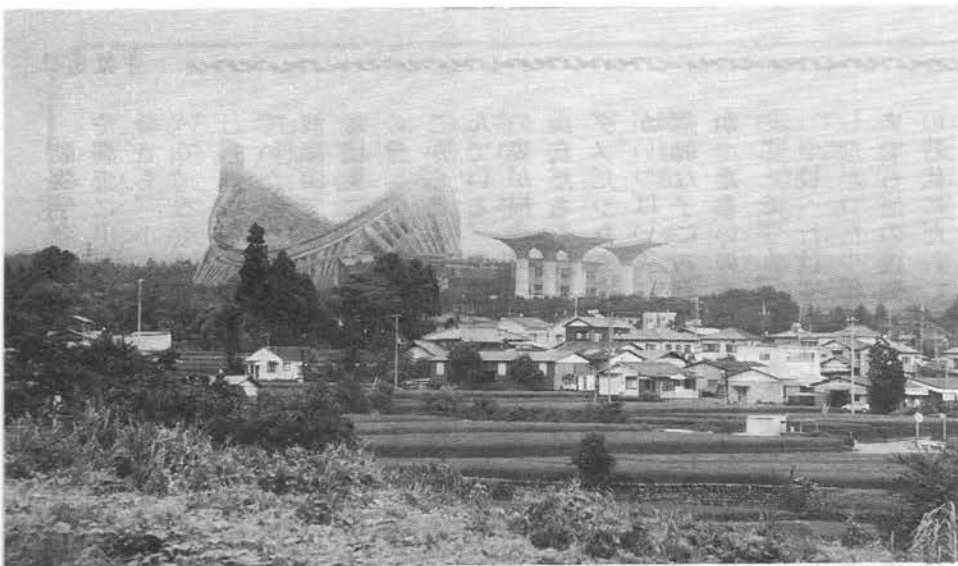
正本堂の正面の門に立つと、円融閣の前後の小柱部分はすでに全部撤去され、大柱が剥き出しに立っていたが、その中の一本はすでに倒されているのが目に入った。

法庭部分も見えたかったが、門はもちろんのこと、正本堂全体が工事関係者



解体される前の正本堂

解体工事は、かなり遠く
からも見るこができる



巨大な掘削機が思逸堂を破壊している



以外は入れないように、嚴重に高い柵で囲まれていて到底無理であった。
新しくできた客殿の前を歩きながら、破壊と建設を繰り返す阿部宗門の行
き着く先をふと想ったが、見上げると、どんよりと闇い雨雲が立ちこめてい
て、まるでそれを暗示しているかのよう思えた。

(七月二十八日撮影・記 編集室)

円融閣の一柱はすでに倒されていた



動物学者として、何度もアフリカへの探検や調査に出かけるなど、一線で活躍してきた著者も、小さいときは病弱な子で寝てばかりいて、ろくに学校にも行けなかったという。

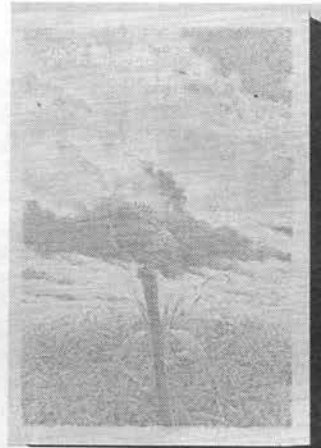
病弱であるゆえにさぞ退屈な日々を過ごしていたと思われるのに、本書に収められた丹波篠山での少年時代の日々を回想した十編の短編集には、学校で学ぶことは少なかつたその分、自然とのたわむれによって、むしろそこからあふれんばかりのたくさんのことを学んでいる、自然をこよなく愛した一人の少年の姿が描き出されている。

友だちもなく、また学校の試験もさつぱりダメだったものの、虫や鳥や魚などの友だちがいっぱいで、なぐさめ、元気づけてくれた。病弱な子にありがちないじけた部分が何もなかったといのも、おそらく自然を相手に多くのことを学んでいたからであらう。

学校へ行けず、ほとんど勉強らしいこともしなかつた少年時代を振り返って、著者はいまでも何の後悔もないと言いつける。そしてその時代にだれにも教わらず、自分で自然から溢れんばかりのたくさんのことを学んだことが、大きくなって大いに役に立ったという。野や川の友だちを相手にして、空想にふけつたり、夢を持ち続けるというイマジネーションの能力を十分に養うことのできたその少年時代に、むしろ感謝しているのである。

読書案内

松田銘道



河合雅雄著

『少年動物誌』

福音館日曜文庫
定価一四〇円

学校の勉強にしばらくはあきらめず、自然の中にたっぷり埋もれて育った少年時代を思い起こす度に、現代の子どもの遊びの内容がすっかり違ったものになってきたことを、著者は大いに歎く。中でも子どもが一番の遊びであった道路が自動車に奪われたことは何よりも腹立たしいと歎き、そして戸外での遊びの締め出しにもっとも影響を与えたものとしてテレビの弊害をあげている。

これらの弊害が心の中にもつている自由なイメージを、いちように固定化してしまうことに心を痛めるとの指摘は、たとえば、豊かな心を育てようと躍起になっている教育現場の悲鳴ともなつて現実化している。教室で些細なことから突然切れて暴れ出す少年は後を絶たず、またその年齢も次第に年少化してきているのが現状だ。いろいろな手段が試みられるものの、対症療法ばかりが目につき、一向に収まる様子はない。

「自然の破壊が大規模におこっているだけでなく、私たちの心の中の自然をも破壊していることがらが、身のまわりをがんじがらめにとりまいていることに、十分に注意してほしい」との著者の心からの叫び声に、真剣に耳を傾ける一人ひとりになることが、何よりも求められているのだらう。自然のもたらす恵みによって人も心豊かになれるのだと痛感させられる書だ。

(正覚院主管)

【婦人部長挨拶】

より一層信心に精進を

婦人部長 尾林 みつ



挨拶される尾林婦人部長

婦人部総会おめでとうございます。

昨年、平成九年十一月三十日、森ノ宮・アピオ大阪で関西婦人大会が開かれたことを契機に、婦人部役員から今年の婦人部総会には、大聖人様が女性信者の方々に送られたお手紙を勉強しようという話がまとまりました。

最初は「教学は苦手」が表に出て、思うように進まなかった取り組みでしたが、各々が御書を聞き、読み始めることから出発しました。

グループで勉強する御書を決め、継命新聞の切り抜き、教材の参考資料、自分たちが勉強したメモ等を持ち寄り、お寺の本堂の片隅で、二人、三人での勉強会を持ち、意見を出し合い、夜遅くまで原稿のまとめをしたり、行き詰まって苦しんだり、悩んだりしたこともありましたが、しかし、それ以上に学んだことが多かったです。

ご住職のご助言、ご指導をいただきながら、今日の日を迎えることができました。全員が信心に一步ずつ前進できたのではないかと考えています。

「諸法実相抄」に、

「行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし、人をも教化候へ。行学は信心よりをこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」とあります。

この取り組みを基に、婦人部の皆様と共に、法燈相続、青年部の育成、また宅お講にも率先して参加し、より一層信心に精進していきたいと思えます。簡単ですが、挨拶とさせていただきます。



発表に関する資料も会場に掲示された

《婦人部総会 研鑽発表》①

日妙聖人の求道の姿に学ぶ

清水光子



発表する清水さん

もとへ、鎌倉から日妙尼が訪れました。「乙御前」という女の子を連れての道中でありました。

その際、再び鎌倉に帰りゆく日妙尼に与えられたのが、この「日妙聖人御書」です。日妙尼には他にも、その一年か二年後の十一月に「乙御前母御書」が鎌倉の尼のもとへ書き送られ、また三年後の建治元年八月にも、身延に入られた大聖人様から「乙御前御消息」が送られています。いずれも乙御前の消息を母尼にたずねられています。日妙尼に与えられたお手紙です。

日妙尼については、鎌倉に住んでおられ、夫と別れて小さな女の子を連れておられた方で、女の子が「乙御前」と呼ばれていることと、また一人の子を預けるところもない境遇で、佐渡への遠い旅を試みたこと、そして後に身延へも何度か

御供養に行つていらつしやることなどを考えると、一応は裕福な暮らしをしていた方のように、身分のある武士の奥さんであつたかと思われます。

鎌倉時代、武士の家は女性も親の所領を受け継いだり、地頭にもなり、夫を亡くした女性も下人を統率し、結婚しても生家の姓を名乗つて自立するなど、その地位はかなり高かつたようです。でも、今風というならば、母子家庭なので、今風においてすら母子二人が世間の荒波の中で生きていくには、大変な苦勞を強いられています。ましてや鎌倉時代ですから、母子二人して生きていく不安と苦勞は今日の比ではなかつたのではないのでしょうか。

日妙尼はそのような不安と苦勞の中で、必死に大聖人様の教えにすがり、男の人でもなかなか行けなかつた佐渡まで足を

私たちの班は、「日妙聖人御書」から、女の身でありながら、鎌倉より遙々佐渡の大聖人様を訪ねられたことに対して、その信仰をほめられて「日妙聖人」と法号を授けられた女性の信仰のあり様を学びたいと思ひ御書をひもときました

文永九年（一二七二）五月、大聖人様五十一歳の時、佐渡一谷の大聖人様の

運んで、法を求められたのです。

今なら佐渡へ行こうと思えば、車や新幹線がありますし、海をフェリーで渡ることができませんから、一日もあれば行くことができます。しかし、日妙尼がどの道を歩まれたのかはわかりませんが、鎌倉街道を通り、高崎から三国街道を越えられたとして、大まかな計測ですが、地図で鎌倉から越後の津、寺泊までの距離を測ってみますと、約三〇〇kmあります。人間が一日歩く行程は約三十二kmとされておりますから、九日から十日かかる計算になります。実際は、当時は草鞋わらじを履いて自分の足で歩き、宿の予約もなく地図もありませんから、泊るところを求め、野宿することも度々あった中、道を尋ね尋ね旅を進められたことと思います。加えて、ただ足を使って歩いていけば目的地に着けたというのではなく、群馬と新潟の県境にある三国街道の難所・三国峠を越えなければなりません。現在は自動車道が開通していますが、それでも険しい坂道でさうとうの難路であります。また当時は、世の中が乱れ、内戦が起こり、謀叛の者が国中に満ちて物騒で

あり、その上人の心は狼や虎のように恐ろしく、また野盗、山賊、海賊という危険が待ち受けています。そこへもつて女性が子供を連れての旅です。九日や十日の日数ではなく、その倍の二十日以上の日数がかかったのではないかと推測されます。

でも、それで旅が終つたのではなく、さらに海を渡らなくては佐渡へは行けません。当時、佐渡島へ渡ることは、船といつても帆掛け船で、強風が吹き荒れる荒波の海は、渡れずに流されたり、転覆して命を落とすこともあり、船を出すことができず船着き場で幾日も待たなければならぬということも度たびでした。

「寺泊御書」には、

「今月（十月なり）十日相州愛京郡依智の郷を起て、武蔵の国久目河の宿に付き、十二日を経て、越後の国寺泊の津に付きぬ。此れより大海を亘て、佐渡の国に至らんと欲す。順風定まらず、其の期を知らず。道の間の事、心も及ぶこと莫く、又筆にも及ばず。但暗に推し度るべし。」（全集九五頁）

と仰せになっています。

大聖人様は、佐渡まで配流の身となり、苦難の旅をなさいましたが、鎌倉から越後の津まで十二日間かかれて、また波高くごうごうと吹き荒れる海は渡れず、寺泊の港では七日間止め置かれたことがこの御書でうかがえます。そうしますと、鎌倉から佐渡島まで二十日間の日数を費やされたこととなります。そのことからすれば、日妙尼母子は、一ヶ月を越える長旅をされたのではないかと想像されます。

ともかく、母子は道中計り知れない苦難に遭われたことと思いますが、ひたすら大聖人様にお会いしたい一心で、題目を唱えながらの道程だったのでは……。

船酔いのつらさもあり、日妙尼は大聖人様がいらつしやる島を目の前にしてどんな思いだったのだろうかと考えますと、私は、どうしてそんな遠いところまで、まして女の子を連れて、何があなたにはあったのですか、と尋ねてみたい衝動にとらわれました。

そこで私は想像してみました。

結婚して子供を産んで、何らかの理由で夫と離別した日妙尼は、幼い子を抱え、

暮らしの上では心配がなくても、自分のおかれた境遇で生きていく迷い、子供の将来、または信仰上の問題、どうしようもない女としての宿業、そういうものが背景にあるのではないか、と想像しないではいられません。そして尼は、そこに大聖人様にお会いしたら自分に何かがわかるかも知れない。このままでは人生一歩も前に進めない、佐渡まで行こう、大聖人様にお会いしよう、そういう思いが、尼を幾重の山坂を越えさせたのではないかと。

でも、どうして女の子を連れての旅だったのでしょうか。きつと、この子が頼みとするのは子の母の私しかいないのに、鎌倉に残していつて心に悔いを残すよりは、一緒に連れていつて共に旅をしよう。共に行くのも不安、動乱の鎌倉に残すのも不安、どうせ不安の人生、母子共に山中に倒れる方があきらめのつく道ではないか、と決心されたのではないのでしょうか。そこに、下男の一々でも連れて行かれていたのなら、私は救われる気がしますが、いずれにせよ日妙尼の佐渡に向う旅の一步一步は、法華経求道の旅であり、

命を懸けた旅であったと思われまます。

大聖人様は、このような真剣な日妙尼の求法の実践に対し、過去の聖者たちが苦行して法を求めた話を示され、正法を



日妙聖人母子の求道の旅（日蓮大聖人御一代図絵）

修行して仏になる行法は、時代によつて必ずしも一定しておらず、成仏の仏果は、今日では妙法を信受することによつて得ることができると教示されています。

そして、玄奘三蔵は法を求めて十万里、

伝教大師は三千里の波濤を越えられましたが、これらは男子であり、上代であり、賢人・聖人であります。しかし、女人の身をもつて海山千里の険難を渡つて、佐渡までこられた例は未だ聞いたことがないといわれます。

また海人は魚を取ることに巧みで、山人は鹿を捕ることに優れています。そこへいくと女の人はものを妬むことに得意と、経文にははっきりと書いてあります。未だかつて仏法に明るいとは書いてありません。女の心を清風に譬えて、風は捕まえても女の心だけは捉えようがない、また女の心は水面に文字を書いても跡形もないのに似ている、そんな女人は狂人にさえ譬えられていて、ある時は真心があります、ある時は嘘つばちだとも。また、心が素直でない女人は、河のくねりに譬えられている等々、ずいぶんと厳しいことが書かれています。

しかし、一転して大聖人様は、この法華経は正直者でなければ信ずることはできません。今この法華経を信ずる貴女は、心の正直な女人であり、須弥山をいただいて大海を渡るような人はあつても、こ

のような女性は見ることができません。必ず仏菩薩・諸天善神が影の添うがごとく、必ず寄り添って守護して下さることでしょう。まことに日本第一の法華經の行者の女人であります。と、その志を褒められて、昔すべての人に「我深く汝等を敬う」と唱えられ、一切の人々の仏性を礼拝した常不輕とよばれた比丘の行儀になぞらえて、今貴女に「日妙聖人」と法号を授けます、と仰せになられています。

日妙尼の求道の旅は、身をもって実践され、辿り着くことの不可能な道中を子供と共に護られ、現実には佐渡まで行かれた信仰の厚きことに対して、大聖人様が日蓮の「日」妙法蓮華經の「妙」をとって「日妙」と授けられたのなら、なぜか私は心の奥深く納得のいく、素晴らしい信心であったと思います。

日妙尼は、不安に駆られれば駆られるほど、苦難に遭えば遭うほど大聖人様を身近みぢかに捉えて、一生懸命に法華經を實踐して、決して大聖人様を遠ざけることはありませんでした。また尼は佐渡へ行かれただけでなく、鎌倉で信心を死守して

いる大聖人様のお弟子方を守護され、後に身延にまで行かれ、晩年は日興上人を頼って重須まで足を運び、始終変わらぬ信心を貫かれました。

ところで、連れておられた「乙御前」の年齢ですが、御書には幼子と書かれていますから、五・六歳までの子を想像しますが、それこそそんな小さな子を連れて一ヶ月近くに及ぶ長旅をすることは不可能ではないでしょうか。

「乙御前御消息」には、
「乙御前こそおとなしくなりて候らめ。いかにさかしく候らん。」（全集一二二頁）

とあります。「おとなしくなりて」とは、大人らしく成長して、ということ、また「乙御前御書」の追伸のところ、
「をとごぜんがいかにひ（尼）となりて候らん。法華經にみやづかわせ給ふほうこう（奉公）をば、をとごぜんの御いのちさいわいになり候」（全集一二三頁）

とあり、乙御前は佐渡から帰られた後、尼になられたようですから、当時の尼になる年齢は十四歳であったとのことらしい。

く、それから推察すると、この当時は十一歳から十二歳ぐらいであったと思われるます。

現在、重須本門寺の近隣にある正林寺の古い塚に、お墓が四つ並んであり、六老僧の一人日頂上人と、重須談所の学頭であった寂仙房日澄師と、母尼日常日妙尼、妹乙御前のお墓と伝えられていると、ご住職にお聞きしましたが、日妙尼には乙御前のほかに、息子さんがあり、いづれの子供も法華經に帰依して法統相続がされ、佐渡へ旅された後の日妙尼の人生は、法華經の信仰の上では、光り輝いていたのではないのでしょうか。

まことに私たちの信仰の鏡である女性であります。

私たちも、遠いから、苦しいから、大変だからといって信心の實踐を怠るのは、結果的に大聖人様を遠ざけてしまうことになる、堅く心に刻んで、日妙聖人のごとく、遠ければ遠いほど、苦しければ、苦しいほど仏法を真剣に求めて実践し、この身に法華經を現したいものであります。

♪「人を助ける身でありながら、あの坊
♪さんは、なぜに夜明けの鐘をつく」
こんな愉快な文句の端唄、だったかと
思うが、間違っていたらご勘弁願いたい。
立場がら先生とか、御導師とか呼ばれ
こそばい思いをするが、通り一遍の話題
には支障がない。ただ、立ち入った本音
の話になると、日頃の横着がしつぺ返

天地つかの間

〔その三十一〕

成田 詳道

しをくらって、苦い思いをする。

よく、僧侶が信者を救済する、成仏させるという考えに出くわす。これは比較的、古くからの法華講員には少なく、創価学会から移籍された人々との、会話の中で、まま聞かれる。

単純に判断して、何代ものご住職がたの中には、いろいろな人がおり、それを目の当たりにして来れば、こんな考えは

起きにくい。だが学会では会員が、お寺や僧侶と接する機会を、極めて制限し、一線を隔したせいも、真顔で言われる。真面目な人ほど、話が熱をおび、佳境に入ると「我々は人々を救ってあげるのだから云々」といった言葉が飛び出す。あわてて「ちよつと待つて下さい。私は他人を救うことなんか出来ませんよ、自



分が救われたいのですから」と遮る。

すると啞然として「あなた御僧侶ですよ、日蓮正宗の御僧侶は人々を救うんですよ」と猛然と突つ込まれる。私は形振りかまわず「私に他人を救う力なんか有るわけないでしょう」と開き直る。それはとても先生や、御導師の会話ではないだろうと内心、後で苦笑いする。

するとトドメの言葉は「じゃあ折伏はしなくてもいいのですか」と怒鳴られ、「折伏は自分の修行です。だから自分なりにしますよ」と答えつつ、なんか歯車が噛み合わんなあと、疲労困憊する。

僧侶が末法という苦界で苦しむ人々の一人一人を引つ張り上げてやるのではない。僧侶も苦界で苦しむ衆生の一人で、我々も法華経、大聖人の教えで共に救われるのである。その教えを人々に伝え、手助けする役目が僧侶である。

だから阿部師のように手助けしない僧侶も居るし、手助けの下手なものも居るじゃないか。不軽菩薩の名前には、常に軽蔑されし者との訳があるそうだが、あなたにも仏性がありますよ、と伝え続けて軽蔑された行為こそが、賞賛に値する。

あらためて、私は他人を救う力なんか無いと繰り返すが、願わくは東の空が白みかける頃に鐘をつき「朝ですよー、朝ですよー、末法の朝ですよー」と知らせる「うるせえなあー」と言われるくらいの僧に成りたいと、心ひそかに念じてる。

(源立寺執事)

ちよつと寄り道 ③②

縁は異なもの

伯耆の里 もりたかんどろ

ほうき塾をはじめて二年ほどすぎたある日、とつぜん雇用促進センターの能力開発部門の担当者から電話があつた。

雇用促進センターというのは、労働省所轄の特殊法人である雇用促進事業団に属する。ここでは、雇用に関する総合サービス、職業能力の開発、勤労者福祉の推進などのサービスをおこなっている。

鳥取雇用促進センターだけでも、20以上の研修コースを設けている。そのいくつかをあげると、新入社員研修、旅館・ホテルマン新入社員研修、経営分析の活かし方、決算申告の実務と演習、危険予知トレーニング、TQCの導入と推進、パソコンで学ぶ『実験計画法』、監督者

訓練・仕事の教え方、財務・計数研修（MGゲーム）、カウンセリングマインド、発想力開発トレーニング、ビジネス英会話、中国語講座、心理学ゼミナールなどなど、まったく多岐にわたる。

その中に、パソコンワープロ「太郎」と「ロータス1-2-3」の二つの研修がある。50ページ近いパンフレットの、この二つの倉吉会場の講師の欄が「交渉中」と印刷されていた。

さつそく担当者と具体的な交渉がはじまつた。といっても、こちらから提示する条件というのはなく、そのまま二つとも私が担当することになった。

この話のうれしいところは、パソコン10台は先方が用意する、会場の手配も先方がする、人集めも先方がする、当方は月水金の夜六時から九時までこちらのテキストを使って講習をするだけ、という願つてもない条件である。つまりパソコ

ンがなくても会場がなくても、ただ「太郎」や「1-2-3」の知識さえあればできるというラッキーな話なのだ。じつさい、先方が用意したパソコンは富士通の最新のノートパソコン、会場は勤労青年ホームの会議室と申し分はない。

じつは、この担当者がテニス愛好家で、たまたまテニス好きのうちの法華講の青年とコート上で知りあつたという次第。この青年は家が印刷屋で、コンピュータ印刷をはじめするために大阪から三年ほど前に帰つてきて、パソコン（MAC）に取り組んでいた。テニスの合間、なにかのはずみに、私の名前が出たようだ。

なお、中国法華講で毎年開催される夏季修養会の定例会場の「備後ハイツ」（広島県福山市）はこの雇用促進事業団の施設であるから、以前から信仰の方でもお世話になつていたことになる。まことに、縁は異なものである。

恵日だより

孟蘭盆会 法要

八月十五日（土）午後一時

日本海側と一部東北地方では、梅雨明



お焼香をされる住職

が、どうか今後ともご容赦のほど、お願い申し上げます。さてお盆当日には、全体に薄曇の広がるなか、今年も盛大に

けの声を聞かぬままで、お盆を迎えるという、日本全体としては不順な天候の夏でしたが、大阪では八月に入るとともに、いつもの蒸し暑い季節が再来しました。七日から始まった連日のお盆棚経廻りには、岡山の興風談所より大谷吾道師、大黒喜道師の応援を頼み、今年も無事に終了しました。

なお毎年変わる道路の混雑事情や、不慣れな土地感などから、訪問予定の時間でご迷惑をお掛けすることがあります



参詣者の真剣な読経唱題

法要が執行されました。

予定表の時間を誤ってしまい、少々混乱もありましたが、事前に塔婆の申し込みを済まされた方が多く、法要は午後一時より献膳、読経、焼香とすすみ、御住職のお説法が終了すると、例年通り三師塔墓前、歴代住職墓前にて、再び多数の有志で読経唱題がなされ、滞りなくすべてを終了しました。

一日講習会のご案内

九月二十七日(日)の午前十時より、一日講習会が、源立寺本堂にて開催されます。今年は先の婦人部総会で、充実した研鑽発表があり、その息吹きを途切れさせず、二陣三陣と続くべく、企画担当者たちが熱心に計画をたてております。

当日は御僧侶の講義は勿論ですが、参加者の有志代表による、パネル討論の形式で「信仰の基本」について話し合う予定です。出席者の飛び入り発言、参加者への感想の発言など、おおいに日頃の信仰を話し合いたいと思います。

さらに今回より新企画として、ビデオプロジェクトを用いて、ビジュアルな研修会をめざします。

すでに、勉強会等の準備会も開いておりますので、ぜひとも大勢の方の積極的なご参加をお願いいたします。

各種のご案内

◎秋季彼岸会のご案内

お彼岸の塔婆申し込みは、早めにお願いたします。なお最近、電話で塔婆を申し込まれる方が増えておりますが、お寺でも忙しい時期に、一軒一軒の申し込み用紙を調べ直し、戒名等を再確認のうえで、申し込み用紙に記入し、塔婆を書きますので、二重三重の混乱と大変な手間を要します。遠方の方や、ご都合の悪い方は、受付に備え付けの「塔婆申し込み用紙」に記入され、先に郵便などでお送り下さると大変に助かります。

また、塔婆をお墓に建立なさる方は、申し込み用紙に「持帰り」とご記入下されば、法要の終了後にごお手渡しできるように、準備いたしますので、お手数ながらよろしくご協力下さい。

◎南近畿教区一泊研修会

のご案内と参加者募集

以下の予定で参加者を募集します。皆さん、ふるってご参加ください(詳細は源立寺受付まで)。

日時 11月28・29日(土・日)
場所 和歌山県 加太国民休暇村
テーマ

一日目: 御開山日興上人に学ぶ
二日目: 正信覚醒運動の活性化
人数 130名(源立寺30名)
費用 13000円
切 9月末日

お詫びと御礼

▼八月号の『恵日』予定表にて、孟蘭盆法要の開式時間を、午後二時と誤って記載し、源立寺檀信徒の皆様には、大変ご迷惑をお掛けいたしました。謹んでお詫び申し上げます。

▼『恵日』の発送部数が大変に増えており、係では嬉しい悲鳴をあげております。それに伴い、今まで住所移転で返送されてきた方もありますが、最近では檀信徒の方々からも住所変更のご連絡を多数頂戴し、『恵日』の返送部数が大変に少なくなつて喜んでおります。

今後とも住所変更・名義変更などがありましたら、速やかにご連絡下さい。

九月の行事

- 一日(火) 午後二時 お経日
- 六日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
- 七日(月) 午後二時 広基寺お講
- 十三日(日) 午後一時 お講・御難会・役員会
- 二十三日(水) 午後一時 秋季彼岸会法要
- 二十六日(日) 午前十時 一日講習会

※九月一日の継命新聞の発送は『神戸・槻木』が担当地区です

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします
締め切りは、毎月二十日です。

【長月詠草】

乗務員の気配りうれし 救急車 慈愛に徹し 送りくれたり
研鑽のテーマ 信仰の基本 病み伏して

み仏のはからい 正に身読

〔橋本 圓子〕

「異国の丘」に始まる 数々の各曲集

吉田正の 通夜に流るる

チエルノブイリの被爆の児らひとみ輝かせ

佐藤しのぶの アベマリア聴く

【恵日俳壇】

泣きに来て鳴る風鈴に心とけ
街の中風鈴の音に買いもどる

〔宮下 留代〕

恵日

平成十年九月号 通巻四十三号
平成十年九月一日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL (〇七二七) 五一一三三三五
E-Mail: gen@ombal.or.jp
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAN)